

## 巻頭の叫び

一。我等光明団々員は如何に生くべきであるか。聖講習会を了えていよいよ団の使命を感じるに重大、以下団の運動に関する態度を明かにする。

一。寺院と本団。我等の運動は過去寺院との関係に於いて、幾多の辛い経験を持つた。特に安芸国の一円に於いて。しかし今、我等の運動は時代に目覚めた先覺的な寺院僧侶の方々の共鳴を得て、どしどし寺院内へ根を下した。光明団は決して寺院を敵としない、又攻撃しない。もし運動に携つた誰かが攻撃的な言辞をもらしたとすれば、それは単なる個人感情であつて団精神ではない。破邪よりも前に顕正である。破邪必ずしも顕正ではない。顕正が徹底すれば邪は自ら亡びる。だが本団のこの非攻撃的な態度は、決して妥協ではない。本団は決して歪められたる仏教と妥協しない。祖師の信条や生活をそのまま伝持しようとする。小しも容謝なく、我等の信条をおしすすめてゆく。

一。社会的迫害に対する態度。新しい運動は必然的に迫害の中に於かれる。誤解から、嫉妬から、認識不足から、そして運動そのものの中にある改革的空気から、更に注意しなくてはならぬことは、運動そのものの中に無意識的に含まれる誤謬から、それらから来る迫害に対してどう生きるか。

1. 先ず罵られても罵りかえし、打たれても打ちかえしてはならない。

2. その非難迫害の声の中から、多くの滋養を摂取すべきである。言いかえると忠実に聞くべきである。

3. もしとんだ誤解である場合には弁解の必要もないし、心を悪くする必要もない。黙して無視して、堂々生きぬくべきである。

4. もしその迫害や攻撃が正しいとわかつた時には、謹んで我を改むべきである。

5. 右をふさがれたら左に、前を碍げられたら後に、本願のまにまに永久に進展すべきである。

6. 寺院が貸してもらえなかつたらば在家、在家も与えられなかつたら、路傍、河原に於いてでも笑つて唯大法を説き、而して聞くという覚悟を持つべきである。

7. 意図的に悪意に団そのものの絶滅をはかろうとする運動に対しても、戦いのための戦いをすべきでなく、唯、大法をおしすすめてかちとるべきである。

一。不断に積極的に。だが運動は決して消極的であつてはならない。絶えず、積極的になさるべきである。平素常に、一人の友から友の上に、家庭から家庭に、村から村へ、寺院から寺院へ、あらゆる縁をたどつて、不断に根強く働きかけて新らしい世界の占領に勇敢に大胆に突進しなくてはならない。

なお、各個人は、把握されたる大信をそれぞれの生活の中に生かして、身をもつて大乘菩薩道を実践して、仏徒としての使命を果すべきである。